

金多 潔 名誉教授インタビュー
「他者を信頼して、大いに活躍して欲しい」

Interview with Dr. Kiyoshi KANETA

‘ Respect Others and Do Your Best Efforts ! ’

『旧制と新制の大学』

2008年6月6日

京都大学桂キャンパス建築学専攻213室

聞き手：古阪秀三
大崎純
石田泰一郎
伊勢史郎

記録：福井浩文

古阪：金多先生は新制ですか。

金多：いや、僕は旧制の最後。旧制が六車先生と、僕と、あと絹谷さんがいたけれど・・・（昭和39年逝去）。新制が巽先生と、南井先生、寺井先生、西川先生。

古阪：旧制ですと、金多先生は三高ですか？

金多：いや、三高じゃない。三高出身の人は、僕のクラスに1/4、7人かな。僕は大阪の旧制浪速高校という7年制高校出身です。当時は、京大でも入学試験のある年と無い年があった。うまく高校尋常科に入れば、スーッと卒業まで行ける学年があった。旧制高校卒業ということは、大学入学資格があるから、入れる。ところが我々の時は、終戦後の改革で陸軍士官学校、海軍兵学校など旧制高校以外の卒業生が受験して、大学の倍率は3倍とか5倍とか。もう、当然のことながら入学試験はあって、それがずっと現在まで続いていますね。

古阪：旧制浪速高校から京大へ？

金多：旧制大学は3年。教養課程は高校で終わっています。今は専門課程が3～4回生の2年間ですが、それが3年間あったわけです。最後の1年は、卒業論文を書いたり、卒業設計をする。あと講義が少しありましたね。そんな状況でしたね。

古阪：新制大学との関係は？

金多：旧制高校は、昭和25年で終わり。だから、旧制高校からの京大の入学式は僕らが最後で、それ以降はなかったのですよ。昭和23年に新制大学ができて、新制高校卒業の人はみんな大学にいきなり行けちゃった。だから、彼らの方が僕より先に京大の1回生になった。その時に、僕らはまだ旧制高校の3年生。

古阪：新制とは、クラスとかはもちろん別で？

金多：別です。僕らは、1年下（新制2回生）と似たカリキュラムでした。その時、新制は教養課程を半分やりながら、建築のこともやりました。ところが教室、製図室が旧制のキャパシティしかない。新制の製

図室をどうするか、となって、急遽、製図室を増設したのです。

古阪：吉田の中庭ですね。それで、旧制大学もやっぱり今と同じように建築は建築、土木は土木という風に分かれていたのですか？

金多：そうです。最初から。第一志望、第二志望というのは今と同じ。

古阪：旧制と新制の人の卒業は・・・？

金多：同時。ですから、その時は就職難ですよ。しかも、その頃、京大は旧制も膨張期でしたね。2年上は20人、1年上は25人、僕らのクラスは30人。1年で5人ずつ増えた。で、新制がまた30人。だから、計60人。僕らの2年上の人には20人で就職戦線やっていたのに、60人、3倍でしょ。本当に就職難でしたね。あっちこっちの会社へ皆受けに行つて。しかし、割合、うまく通ってきまして、ぜんぜん就職できなかったという人はなかったと思います。

古阪：そのころ、研究室に分かれるのは、3回生になってから？

金多：そう、3回生になってから。

古阪：30人の学生で、どんなバランスですか？

金多：その時は、研究室の定員枠は一切なかったですね。自分の好きなところに申し込みれば、先生が嫌と言わなければ、そこに入って勉強できた。うまく分散していましたよ。計画系は、森田先生、それから増田先生、西山先生、その辺りは人気がありました。構造系は坂先生、それから棚橋先生。また、小堀先生も若くていらっちゃった。

『鉄骨構造の研究・実践へ』

古阪：どうして鉄骨に行かれたのですか？

金多：そうですね。僕が入学したときの教室主任が棚橋先生で、第一印象が非常に良かったのでね。なんかこう福々しい感じ。ああいうタイプですから、ここへ行ったらあまり絞られなくて、好きなことをやらせてもらえるかな、と思った。研究室配属のときに研究テーマが出てきます。そのときに見たのが、「スカイスクレーパの振動」というテーマ。これは、棚橋先生、小堀先生のご専門で、今の超高層のあけぼのという先走りというか、日本に「超高層」の概念がなかったときに、「スカイスクレーパ」は非常に魅力でした。僕は、けっこう設計も好きだったので迷ったけれど、スカイスクレーパという文字に惹かれて入ったという感じ。だけ

ど、その時は、鉄骨構造じゃなくて、むしろ振動論でしたね。入ったら、棚橋先生と小堀先生とお二人で、本当にマンツーマンで指導して頂いたのは幸せだった。棚橋先生は『鉄骨構造学』という本を早くから出版していて、それが非常に名著だったものですから、鉄骨構造のオーソリティということになっていたのです。

大崎：棚橋先生はどのように指導されたのですか？

金多：棚橋先生は、「ポイントはこれだ」と、ヒントをバシッと与えられて、「あとは考えてきなさい」「こういうところは小堀先生に相談してきなさい」、と言う。だけど、その研究の見通しは持っておられた。最初から計算してきたら、多分こういう方向になるはずだ、と。棚橋先生からいろいろテーマが出てくるけれど、棚橋先生が最初に序文、アブストラクトを鉛筆で書いて、そして、結論を書く。その中間がブランクで、「ここを埋めなさい」。そういう形の指導でしたね。やりがいがあるようなないような。そして、その結論は必ずしも正しいとは限りませんから、ひっくり返ったら面白いなという好奇心があるし、非常に面白かったですね。

古阪：金多先生は大学院に行かれたのですか？

金多：いいえ。昭和28年に卒業して、すぐに前田先生から言われて助手にさせていただいたのですが、ちょうど天沼さんがその年に着任されたばかりで、手続きの書類が1か月間宙に浮いていて、発令は5月。1ヶ月の間どうするか。とりあえず旧制大学院に入っておけ、1ヶ月。それで中退という形ですね。旧制大学院には授業料がなかったように思います。旧制大学院の人は何人かいらっちゃいましたが、いつも図書室で悠然と朝から晩まで本を読んでいて、読み終わると、はい帰りますと。

大崎：講義もなかったのですか？

金多：講義はないです。自分で本を読む。旧制はそんな感じでしたよ。今の新制は、個別指導。特に最近講義もきちんとやりますが、昔は大学へ入ったら学生が自分で勉強するもの。それに対して先生は指導の方向性とかヒントを与えるだけで、あとはその成果を評価します。だから、その途中は自由にやりなさいみたいな。本当に自由でした。

古阪：助手になられたのは、棚橋先生のところですか？

金多：そうです。

古阪：コンクリートには、関係されず？

金多：コンクリートは坂先生の方です。六車君も、最初は棚橋先生についたのですが、坂先生の研究室に後継者がいないということで。ちょうど坂先生はそのころPSコンクリートをやりたい、ついては力

の強そうな、体力のあるやつがいいな、ということで、棚橋先生が、それじゃあこいつをとという形でトレードされてね。それで、六車君は坂研究室の大学院生になりましたね。

古阪：それで、PSの専門家に。

金多：そう、それでPS。

古阪：六車先生も振動論を？

金多：いや、もうPS。彼は、学生の時は地盤工学をやっていました。大阪中之島の堤防の近くに堂島ビルというビルがあって、軟弱地盤で傾いちゃって、その実測に行っていましたよ。そのとき、棚橋研は6人いますね。僕と木村君が振動論を、あとは地盤工学をやった。4人もいるから、その実測にはちょうどいい。六車君も含めて4人で行って、その建物の不同沈下に関する論文を4人共同で書いて、適当にそれを分割して、卒業論文にしたような気がしますね。亡くなったけれど、あの馬場善雄先生（今、阪大で構造をやっている馬場研介先生がいるでしょう。彼のお父さんですね。）が非常に愉快な人でね。

古阪：それで、しばらく助手をされて…。

金多：31年にアメリカへ行きました。スタンフォード大学に2年間いました。3年行きたかったのですが、助手になっていましたから、2年でないと休職扱いになって将来不利になるぞ、2年で帰ってきなさいと棚橋先生に言われて。独り者がアメリカに行くと長くとると、青い眼の女の子と一緒に[♫]では困ると。

古阪：帰国後、土木工学科の講師、そして防災研に行かれて、39年は第2学科ができた年ですね。

金多：第2学科ができると新聞に出ましたが、最初は全然実感はなかったですね。というのは、あれは学年進行で行きますから。最初教養に行く学生定員だけが増えて。それまでの50人に第2学科の40人を加えて90人。建築学科も、そういう意味では高度成長のあの時期に膨張しました。

古阪：僕は、もっとあとの45年入学で、金多先生のレポートで、東京の皇居の前にある超高層が立ったときの工事の電算システムについて考えよ、という課題を出されて…。

金多：そうでしたか？そんな高尚なことは、僕は…。

古阪：えらい変わったレポートだなという印象が残っているのですが、電算機との出会いというか、付き合いというか。

金多：京都タワーの設計の時は、5インチの計算尺と、タイガー計算機ですね。タイガー計算機は肩が凝るから、あまりやりませんでした。建築は、5イ

ンチの計算尺でしたが、土木の方は一生懸命タイガー計算機を回していましたね。ちょっと悪口になるけど、僕はその時、この人たちは何でそんなに回すのかなと疑問に思いました。例えば、建築でも震度0.2とか言っているでしょう。要するに重力の2割だと。0.2という有効数字1桁のものでスタートして計算している。それを土木では、小数点以下10桁ぐらい書いてね、いちいち克明にやっている。おかしやないか。どうでもいいような桁数まで一生懸命計算して、それをまた写しているのは…とっていました。まだ、今みたいに、プログラムができていなかった。パンチカードをドカッと1つ1つ打って入れて、非常に面倒なことをやっていました。1つの計算をやるのに半日かかるとか、1日かかるとか。でも、途中でバグがあったり、なかなか使い物にならない、という記憶があります。

古阪：実用化に取り組まれたのは早いですか？

金多：割合早かったですね。アナログコンピュータは、水畑耕治さん（当時：京大助手、後に神戸大学教授）が一生懸命やってね。真空管からなんや買ってきてね。

古阪：そういうの、ありましたね。

金多：あったでしょう？

大崎：ありました？

古阪：あったよ。ほら、ほとんど使われない部屋。

大崎：ああ、はい、電算室というのがありましたね。

金多：あったでしょう。あの電算室のスペースそのものが、旧制2回生の製図室。2階が3回生、1回生がある細長い。学生定員が増えて、製図室としては使えないというので、構造の実験室か、計算室とかに使い道はないかと。あれは、建築界では先駆けですよ。要するに微分方程式を解くための回路を組んでいましたね。質点数の少ない振動系ならあれで結構。

古阪：あそこなんか、どうなったかわからないけど、ちゃんと残しておいて、展示していたら、面白かったでしょうね。

金多：そうですね。歴史的なものとして。でも、今から見たら、幼稚な、ちゃちなものですから、残っていないのも仕方ない。

大崎：金多先生の講義は良く覚えていますが、溶接の話に長い時間をかけておられましたね。そのご研究をされるようになったのは、いつからですか？

金多：昭和40年に、建築第2学科に講座ができました。最初に鉄骨構造の講座、それから西山先生が教授になられた地域空間の計2講座。翌年に鉄筋コン

クリート。3年間で6講座ができたのですよ。それまで棚橋先生の鉄骨の講義では、リベット構造や鉄骨構造の発展の系譜、計算の方法、構造設計の方法、などを詳しく教えてもらったけれど、40年の時点で社会を見ると、もうリベットは過去のもので、いよいよ溶接に切り替わる。だから、僕がリベット構造を教えても、これは所詮古い知識で、実用化しない。それで、自分で一生懸命溶接の勉強をして、溶接の方に重点・力点をおいて、講義したことは覚えています。しかし、一応、リベットのことも話しておかないと、先輩の人と話が通じなくなるから、その両方を足して。

大崎：あんまり、講義には出ていなかったのですが、溶接の話はよく覚えています。それ以外はあまり覚えていません。

金多：結構、リベットの話もしていたのですよ。大阪駅前の阪神百貨店の建設のときに、僕は大阪駅のプラットフォームからじっと見ていた。下でリベットを焼いて、ポンと放って、上で焼けた真っ赤なやつを受ける。あの技術は今のプロ野球の内野手の技術に匹敵すると。しかもあれは、かなり練習するのですね。台湾出身の人が、多く従事していたと聞いています。リベットがなぜダメになったかという騒音問題ですね。溶接は静かだから。だけど、考えてみれば溶接も二酸化炭素をどんどん出しているわけだから、決して、健全なものではない。

『柔剛論争の真相』

古阪：その頃に僕の印象に残っているのは、柔剛論争ですね。京大がどちらかと言えば柔で、東京のほうが剛だと。

金多：柔剛論争は、僕の入学する十数年前に起こっているわけです。棚橋先生がまだ助教授の時代。柔構造、剛構造というのは第三者がつけたのです。棚橋先生はむしろ、速度ポテンシャル論（力ではなく、地震のエネルギーの次元で考えなさいという理論）を出した。ところが、東京の方は、もうまさに剛構造。とにかく耐震壁とか、大きながっちりしたラーメンで、力に対して力で対抗するという形です。だから、自称、剛構造。しかも、剛構造と違う系統のものはすべて柔だと。そういう風に第三者が面白半分には言ったのですが、それが一人歩きした。「速度ポテンシャル論」対「力」だったのが、すり替わった。それ以前に、眞島健三郎という海

軍の土木の高級将校（舞鶴鎮守府にいたのかな？）、その人が本来は柔構造だと言っていた。いわゆる串団子のモデルを出して、地震が低部で揺れるとこれはこう振動する、とにかく建物は揺れるという。それは要するに剛ではないから柔だと。そういうのがちょっと前にあってね。だから、棚橋先生の論文はそのカテゴリーに入る。それで、論争みたいなことになったのです。武藤先生は、そのとき、後ろで腕を組んで成り行きを見ていた。その先発、真正面に出てきたのは、確か河野輝夫先生。河野先生と棚橋先生が、論文、学会で、討論された記録が、今でももちろん残っているでしょう。僕らが学生のときは、引き分けみたいな状態で、勝負がつかなくて、じっとしていましたね。

古阪：それが、しかし、霞が関ビルでは…。

金多：霞ヶ関ビルのときに、武藤先生は「俺は柔構造の創始者だ」と言ったので、僕らも皆、へーっと。棚橋先生もニタッと笑っていましたがね。何もおっしゃらなかったですね。

大崎：棚橋先生の業績は、あまり表に出ていないですね。

金多：出ていないですね。

大崎：東京の人が取ってしまったというか。

金多：東京の人は、まず叩いておいて、しかし、いいところだけさっと取って、それで、その最初に言った人のことは一切言わない。そういうところはあるでしょうね。

古阪：金多先生が助手の頃は？

金多：そのころ、棚橋先生は木造も含めて、いわゆる塑性を研究された。東大は皆、弾性でしょう。

古阪：霞ヶ関ビルといえば、解析を始めたのが38年とかそのころですね。10～15年ありますね。

金多：その間に、武藤先生がサッと変身した。だけどね、別に取ったということでもないですけどね。今のレンガ造の東京駅があるでしょう。そこに国鉄が超高層ビルを建てるために委員会を作って、武藤先生も、棚橋先生も、僕らも全部集まったときがあった。棚橋先生は別にけんか腰ではなくて、その時、武藤先生とも非常に和気藹々としておられた。鉄骨超高層なら、当然、振動解析ですね。武藤先生もやっておられる。そこで、共同研究をやっておられる間に、なんとなく、武藤先生も柔構造の方に頭がだんだんいって…。僕の想像ですが、武藤先生の頭の中では、やっぱり建物はフレキシブルなもので、長周期のものが耐震的には有利だと分かってきたのではないかな。ヒントは棚橋先生の仕事だけれど、一緒にやっている間に武藤先生の頭が洗脳されて、洗脳されたあかつきに自分が

霞ヶ関を設計したものだから、やっぱり「私の理論」という風になってくる訳です。傍から見ると、急に宗旨替えみたいになったけど、プロセスをたどっていくと、武藤先生が柔構造とおっしゃるのも、当然の成り行きかなと。だから、誰が早く言ったとかそういうことはあまり問題ではなくて、柔構造という形で、その方向で研究した成果が霞ヶ関ビルになったと思えば、それで別に対立的なこととは何もない。

古阪：そうしますと、ポシャッたけれど、東京駅超高層プロジェクトが、引き分けの、一緒の土俵で…。

金多：むしろ、握手したみたいなことになったんじゃないかなと思います。

古阪：鉄骨では、全部溶接すれば「剛」と見るのですか？

金多：鉄は非常に硬いですが、鉄骨の部材そのものは、断面が小さいですから、結局は弾性変形、弾塑性変形します。

古阪：鉄骨を使うことは「柔」と考える？

金多：もう、本来「柔」と考えざるを得ないと思いますね。

それを強いて「剛」にしようと思うと、鉄骨フレームの間に耐震壁をがっちり入れて、むしろフレームが動かないようにしないと剛構造にはならない。

古阪：すると京都タワーも、やっぱり柔と考えるのですか？

金多：そうですね。タワーは純鉄骨ですから。これはもう柔ですね。現に本当にフラフラ動きます。昭和39年にできて、52年ぐらいに大きな台風が来たのです。そのときに、タワーの会社の人が、夜中に見に行ったら、塔がものすごく揺れていた。それから平成7年の阪神・淡路大震災。そのとき、京都は震度5でしたが、ビルの横でタクシーの運転手が見たら、タワーがものすごく揺れて、今にも倒れるかと思ったというぐらいに揺れたそうです。それで、僕も心配で見に行き、各部分を点検したのですが、全然何ともない。やはり、完全弾性範囲でした。当然揺れて然るべきで、問題ないのです。

古阪：京都タワーの設計時、金多先生は？

金多：防災研究所の助教授でした。夏休みに設計していました。

『文化財修理の拠点としての構造系講座』

古阪：建築の中では木造をあまり教えていない。阪神大震災以降、鈴木先生や、いろいろな方が研究教育されて、世の中に貢献していますが、昔から「木

造は扱わない」というのがあったのですか？

金多：いや、そうではなくて。僕は、木構造を小堀先生から教わった。その前は横尾先生が教えておられて、その前は棚橋先生。木構造という講義は、ずっと、かなり昔からあったのではないですか。

古阪：ある段階で切れてしまった？

金多：第2学科ができて、講座数が増えたでしょう。そうすると、なんか変な話ですが、それぞれの講座が必修講義を1つ持たなければならぬみたいな風潮があって。僕らの時は5講座だから、必修は5つ。それが10講座になると、倍になるでしょう。そうすると、必修が多くて時間割が組めなくなったのですよ。そうすると木構造なんかは選択にしようとなって。で、そのうちそれもなくなった。要するに時間割に組みようがないから。それで、鉄骨構造と木造は似ているからね、鉄骨構造のところで、ちょっと話してもらえないかという話があったりして。それは中途半端だし、もうやめましょうということだった。そうしたら、農学部部の林産工学の先生がそれを聞きつけて、僕の講義を聞きに来られた。その翌年から、その先生たちが、農学部でずっとやっていましたよ。木研の所長になられた佐々木先生と、ちょっと若い増田先生。あの2人で連綿としてやっていて、最後が僕。定年の2年前に、非常勤講師で2年間。

古阪：阪神大震災以降に、木造の力学的解析が弱いと、鈴木先生たちが始められて…。

金多：そういう意味で、ニーズ次第じゃないですか。あの時代は確かにコンクリート、鉄骨の全盛時代で、木造はかなり斜陽化していた。それに、木造は大工さんがノウハウをきちっと持っておられたから、今更ということもあつたし。

古阪：今も金多先生が広く関わっている文化財修理は、現職の頃はあまりやられていない？

金多：いやいや、そうでもないですよ。これは言うなれば、京大工学部建築の守備範囲の1つの重要なポイントなのです。例えば東大寺の南大門。平清衡に焼かれ、あとで源氏が復興しますね。それが現在も残っている鎌倉時代の建物ですが、その修理は坂先生が鉄骨を使ってされたのですよ。あまり知られていないけど。棚橋先生は、法隆寺の五重塔の一番上のところをやっぱり鉄筋を使ってやって、それから法華寺なんかもやって。それから、僕が助手になってしばらくして、姫路城の大手守。あれも棚橋先生が構造を担当された。関西の古建築、重要文化財は、京大の構造の先生がずっと手掛けてきておられた。もちろん、歴史の村田先生

も。小さい建物、大きい建物、茶室も含めて、京都大学はいろいろな歴史・意匠をやってきましたね。それがずっと、いまだに続いていると僕は思っています。

古阪：そうですか。金多先生は、東大寺の素屋根をされましたね。

金多：あれは、昭和49～50年ぐらいかな。当時は、村田先生と棚橋先生が京大から委員になられ、後で僕も委員に加えてもらいました。大仏殿は、昭和の大修理として、瓦を全部葺き替えて、鉄骨で大屋根を架けるということでした。鉄骨構造をその辺から売り出していったのです。姫路城や昭和20年代の修理では、全部杉丸太で素屋根を組みました。それを、東福寺山門のときから、素屋根を鉄骨にして、さらに天井走行クレーンを使うと工事が楽になるという提案をしました。京都府の担当者もはじめ難色を示したのですが、一度やってみようかというのが、最初でした。東福寺山門でうまく行ったので、大仏殿もやりました。昔の明治、大正の人は力があるから、少々重いものも担ぐけど、昭和の人には無理ですよということで、全部チェーンコンベアや天井走行クレーンを使っていました。

古阪：東大寺以降の、京都の本願寺は両方とも同様ですね？

金多：そうですね。いわゆる鉄骨のスライド工法は、東大寺をスタートに、大きな物件は全部そうです。

古阪：文化財的な大きな素屋根工法については、鉄骨構造、リフトなどは、ほとんど金多先生が手掛けられた？

金多：手掛けるというよりは、メンバーに加わっているだけです。別に僕がリーダーシップを取っている訳ではなくて。

古阪：でも、過去からそういう苦労をされて、編み出した技術と言う意味では…。

金多：西本願寺が一番ユニークでした。荷重をかけるために、水を使いました。タンクを用意して、水を重石にして。一番環境にやさしいということで。

古阪：一方で、レンガ造の文化財にも関わっておられますね。

金多：そうですね。今、舞鶴のレンガ造の設計をやっています。荒木先生がやっています。

古阪：世の中で、そういうことに目が利くというか、そういう仕事ができる人というのは、大学の先生以外にあまりいない。

金多：まあ、僕自身が好きだからじゃないですかね。割とそういうのが好きなんです。昔から。文化財は、京都・奈良が圧倒的に多いですからね。東京

の大学の人がここまで来てというのは大変ですから。京都は地の利を得ているから、今後ともやっていく必要は大いにあると思いますね。

『大学教育に欠けていることは？』

古阪：そういうことから言うと、大学や教育としては…。

金多：1つの柱ですね。世界遺産も含め、日本の財産を守り続けていくには、関西で多くの物件を見ている京都大学が、決して目をそらしてはいけないと思います。だから、それぞれの先生方の得意技を使って、取り組んでいただければ、十分やっつけられる問題だと思います。今はまだ過渡期で、そういう工法が、いろいろ試作・試みの段階ですから、これからの人にどんどん研究していただきたい。大事なテーマだと思いますね。

古阪：金多先生で自身が努力された独学の部分と、大学で教わったことと、両方あると思います。その立場から、大学教育に何か抜けていると感じられることがありますか？

金多：あまりそれは感じませんね。みなさん個性を持っておられるし、それなりに考えておられるし、特にこれは欠けている、ここは疎かにしているとは思えません。むしろ、皆さんの天分なり個性なりを発揮する場が、そういう分野ではたくさん用意されているなどという感じはします。

古阪：場があるから飛び込めということですね。

金多：そうそう、そういうことですね。

大崎：最近、教育はそんなにのんびりしたことを言われていられなくなってきて、…。

金多：だから、それがね、僕らのときのいい時代と違うなという感じはしますね。僕は、冒頭に言いましたように、「大学というのは、学生が自分で考えて、自分で勉強するんだ。先生はそこで傍からちょっと最小限のアシストをするだけだ。」という教育を実際聞いて、実践してきたのですが、今はどうもそうじゃないのです。むしろ、きちっとしたカリキュラムがあって、内容はガッチリ。それをきちんと教えるということで、休講もしてはいけません。僕らのときはね、休講というみんな学生は万歳って。だけどそれでみんな遊んでいたかという、そうではなくて、そのときに勉強したり、ディスカッションしたりして、決して時間の無駄ではなかったと思います。はっきり言うと、昔の方が、ゆとりがあったと思います。今は、そのゆとり

がなくなって、24時間緊張が続くような、そんな感じではないかなと思いますね。僕は目が悪くてインターネットをしません、今は大変なのでしょう？メールはもうびっしり来て、それにきちんと応答しておかないと、あいつは生きているのか、死んでいるのか分からんと言われる。昔はそんなこと全然なかったですからね。だから、本当に融通無碍と言うか、建築学会の論文の締め切りが昨日でも、まだ電話を掛けて、もうおとついで出したんだけど、まだ届いていませんか？とか言ったら、まだですねと言われて、それを済ませてから、原稿を清書してね。そういうのが許されていたのですが。今は、もうすぐに、即刻送ってくれでしょ。その辺のゆとりはいい意味でも悪い意味でも、なくなっているかなと思いますね。しかしまあ、世の中は、その今の方がいいんだと。昔のそんなことをやっている、ろくな人間が育たないと言われているのでしょうかね。

大崎：最近、JABEEで、試験問題も保存しないといけなくて、どのような答案に何点つけたのかというのをちゃんと評価されます。あまりいい加減なことができなくなっていますね。

金多：それは、僕もそう思いますよ。僕はスタンフォード大学の大学院マスターコースの講義を受けたのですが、そのギア（Gere）という先生が試験をしましょう。すると終わった途端に、もうその問題を廊下にポンと張り出す。これは何点、これは何点と赤い字で書いてあって、そういうのが全部、毎年出ますから、みんな分かった。それは公正な意味でいい方法かなと思った。僕はそういう意味では、試験問題をずっと貯めて持っていました。それで、満点は何点で、どこをどう間違えたら何点引くというのを持っていましたね。それから、グーディア（Goodier）という先生、これがまたすごい先生。ティモシェンコ（Timoshenko）の『Theory of Elasticity』という本の章末に練習問題みたいなものがあるでしょう。それが実は試験問題なんです。ちょうどそのまま印刷されるぐらい。ところが、それだけ見ると、学生としては難しすぎてどうしようもない。で、その試験の間にヒントを黒板にずっと書いていくのですよ。この式を使いなさいとかね。ある程度誘導してもらっている訳です。それがなかったら、難しすぎてどうしようもない。そういうやり方もありましたね。だから僕は、試験のときに毎行行って、問題を解説するときに、口頭で、ある程度ヒントを口で言いました。それはまあ、グーディア先生のやり方が

いいなと思ったからです。

大崎：日本もアメリカ的にならないといけないということですか？

金多：まあ、いいところはとつたらいいと思います。だけど、毎週毎週、宿題を出して、すぐに中間試験とかやられるよりは、日本の方が気は抜けるかなという気はします。アメリカの大学はやっぱり点数主義ですからね。1学期悪かったら、もう、君は転校した方がいいよと通告されるし。

大崎：成績が悪いと奨学金ももらえなくなります。

金多：成績が良ければ、君は是非進学して来年やりたえ、みたいなことを言われる。それが本当にいいことかどうかという疑問を感じるがあります。

『京都そして京都大学の利点』

伊勢：2つお聞きしたいことがあります。「地域の差」と「時代の差」です。大雑把な話になってしまっただけですが、京都の位置は学問的に見てすごくいい位置にあるような予感がします。先生の話も聞いていても、客観的にもものを見て、自分のペースですずとやってきたような印象を持ちました。いつも自分のペースながらも、いろいろな建築と関わりながら、やってきたように思えたのですが、そういう、京都の、京都大学にいたことの利点というのは何なのでしょう？

金多：そうですね。僕が京大を選んだのは、そのときの社会事情でもあったと思います。旧制高校ですから、全国どこでも受けられて、東京に行った人もいるし、東北大・北大に行った人もいます。が、やはり昭和25年は、昭和20年の終戦から5年目ですから、まだ食糧が足りなかったのですよ。東京は焼け野原で、まず、下宿もない。親類がいれば、そこに行けるけれども、という時代でした。自動車も行列して並ばないと切符を買えない時代だったので。そんな背景では、関西以外は大学として進みたくても物理的にダメだという、そういう事情をよく感じましたね。東大や東北に行きたいという人は、それぞれ親戚がいたり、知り合いがいたりしました。だから、我々の高校の大多数は関西、京大か、阪大に行くということで。

伊勢：戦災を免れた？

金多：ええ。京都は戦災を免れた。僕らは大阪に住んでいましたから、大阪なら家から通える。その当時は、阪大は「建築」じゃなかったのですよ。構築工学という、昔の航空工学科が戦後禁止されたので、「構

築」という名前にしたけれど、何となく講座が整っていなかった。京大は、「建築」としてあって、1回見に来たら、茶色い建築の本館が、レンガ造の学内では非常に新しく見えたのです。ここで勉強するなら、ということを受けたのが本音です。そういう感じに入っているから、別にその、京都大学の学風がどうだとかそういうことは何もなかったです。

大崎：東京の先生方のようなスタイルで研究しようとは思われなかったのですか？

金多：僕らは、いわば井の中の蛙みたいなもので、東京に対する知識があまりなかったですからね。だから、東京の先生がどのようなスタイルなのかわからない。それが、小堀先生が早稲田からお見えになったから、東京の気風がだいぶ感じられましたけれど、それでも、小堀先生という1人の人を通じてですからね。それで、勢いマイペースになってきたと思いますね。もうひとつ、僕が大学を受けるときに、建築か、機械か、土木かと迷いました。昭和20年に湯川秀樹博士がノーベル賞を取った。だから僕らの学年は、京大の物理にもものすごく殺到したのですよ。あのとき、何倍かな、二十何倍だったように思います。それからまた、化学がいいぞというので、化学がものすごく倍率が高かった。建築も結構高くて、そのとき3.5倍かな。土木は2倍ぐらいかな。大阪で高校生のときに通天閣に上りました。そしたら、もう見渡す限り焼け野原。バラックが建っている。それを見て、これから大阪や戦災を受けた日本中の都市が発展する、それにはまず建築だと。それなら今建築を受けて、建築の分野で仕事すれば、食いはぐれはしないだろうと。終戦直後の、本当に食料もなく、どうして生きていくかという時代の感覚として、建築はいいな、というのがあったと思いますね。子供の頃は航空少年で飛行機の設計がしたいとか、そんな夢はありましたけどね。それにも多少近いし、建築は面白いんじゃないかと。

伊勢：名誉教授の先生方の話を聞くと、やっぱり非常に楽しい大学生活を送られた印象を持ちます。先生から見て、昔と比べて今の大学や、建設業界の変化はいかがでしょうか。高度経済成長とも関係あると思いますが、昔の方が活気があって、今の状態は楽しそうに見えない。何か違う理由というか、行き詰った原因というか…。

金多：おっしゃるとおりだと思いますよ。僕らが昭和28年に卒業した頃から、本当の意味での高度成長が始まりかけていました。終戦直後の何もモノがな

かった時代から、いよいよ本格的な建築が始まる。目標がいっぱいあったと思うんですね。あちこちにビルが建ってきて、RCビル、鉄骨ビル、それから工場。全国の大学の工学部が膨張して。でも、人が少なかったですね。1学年30人。それでも増えて30人ですからね。その意味では、多人数教育ではなくて、マンツーマン教育に近く、先生との距離は近かったと思います。

古阪：今も、学生全体としては多いけれど、教員も多いですね。本当は、何人を相手にするかというのは、そんなに変わってないですね。

金多：そうですね。先生と学生の比率は変わってないですね。

古阪：やはり時間ですね。雑用的なことも含めて、やることが多いというのと、学生のいろいろな世話をしなければ、ということで時間がない。

金多：先生方に時間がない？

古阪：建設現場でも時間の余裕の取り方は違ってきている。良くも悪くも忙しくなっている。

金多：確かに、時間的に余裕がなくなったというのが現代の象徴じゃないですか。昔は本当にのんびりしていましたよ。設計事務所に実習に行くと、夏ですからカーッと暑くなってくると、扇風機を回す。そのころトレーシングペーパーですから、汗がつくとトレーシングペーパーにシワが寄るから、もうちょっと涼しくなるまでやめたということ、みんな、その間いろいろ頭で考えて…。今はそうではなくて、もう完全に冷房にあたっていますね。

大崎：建築業界に、最近活気がないということではないですか。

金多：それは言えます。

石田：建築は顕著かもしれないけども、工学全体ですよ。他の学会でも、学生さんの理工系離れが問題になっている。建築だけの問題じゃなく、たぶん高度成長がほぼ終わったというのが見えている。これからは、巡航速度でいかに進むか、と。

金多：昔は汗を流して働いて、それでモノを作った。それに満足感があって、給料は高いに越したことはないけれど、仕事が立派にできたことに喜びを感じていた。今はそんなことより、株や商品相場に手を出したりした方が左団扇。そういう時代というのは、ちょっとおかしいですね。

『変わりつつある大学教育の質と量』

石田：今は、JABEEの次の問題というが、また新しい問

題があります。建築士の資格認定に必要な大学教育の認証で、こういう科目をちゃんと教えなさい、とカリキュラム自体に縛りが入ってくる。それに、今まで大学院の2年間を実務経験に算入できたのが、どうも認められない。要するに、大学院の教育に実務経験としてインターンシップを入れる話もあります。その辺の先生のお考えを。

金多：私の頃は、大学の教室で一級建築士という話は教授、助教授の先生方から一切出なかったです。一切なかった。公務員試験の話も何もなかった。ただ「君ら勉強してますか？」という話はしょっちゅうありましたけどね。社会に出た後の問題は一切なかったです。一級建築士についても、卒業してからそういう制度がある、実社会に出たクラスメイトはもう取った、そろそろ勉強するか、みたいなことでしたね。それも初期の頃は、一級建築士は無試験で実務経験だけで取れたとかね。そういう話を聞くと、まあそんなものかなと暢気にしていました。旧制大学院は実務もヘチマもなく、図書室で本を読んでいる訳ですからね。新制になっても、修士の2年間を実務と見るかどうかという議論はかなり後になってなされていたように思います。

石田：むしろ、実務に認めてくれなくてもいいと？

金多：実務に認めなくてもいいと思います。常日頃から思うんだけど、一級建築士は国家試験で、けっこう合格率が低くて、難しい試験でしょう。それを取って、いったいどれだけの価値があるかということです。医師免許とか、司法試験とか、弁護士の資格とかに比べると、かなり低いところに位置づけられている気がしてならない。それは結論的にいうと、医者でも弁護士でも、その資格者自身が仕事をして初めて、それなりの実力が伴う。一級建築士の場合、会社に誰か1人でもいると、みんながやっているものを、その1人の建築士のハンコで全部通っちゃう。要するに他の無免許の連中のワークが評価されざるを得ないみたいなことになる。すると一級建築士といっても、実は無免許のヤツが作ったものだよ、そういう成果物だよということで低く見られているのではないかと。もし、本当の一級建築士だったら、自分で敷地を確認して、現場には当然一級建築士が立ち会って、説明する。それで建築申請で行政と渡り合う。建築士以外の人が行っても、もう門前払い、本人が来なさいということにしないと、建築士の価値は社会的にも認められないんじゃないかと思います。それ以前の段階で、マスターコースを実務とみなすかどうかという議論をするよりは、むしろ、

建築士の資格の価値を高めるにはどうしたらいいかということを経験界全体で考えないと。もうまさに、医者に見下ろされ、弁護士に見下され、建築士なんてのはそんなもんですよということになってしまふ。それでは一生懸命とって、何のメリットがあるのかということになる。要するに、名義貸し、これが一番の問題じゃないかと思いますね。他の職種は名義貸しができないですからね。

石田：弁護士がそれをやったら大変なことになりますね。

『他者を信頼して、大いに活躍を！』

古阪：何か、金多先生から、言っておきたいことは？

金多：いや、特にありません。皆さん、真面目に良く働いておられるから。

大崎：最後に、今後の建築、あるいは京大に期待することをちょっと。

金多：期待するところは大きいです。いい建築家を育てて欲しいと思います。その期待は常々もっています。それで、皆さんを信頼して、大いにやって欲しいと思いますね。ただホントにね、つまらん雑用が多すぎると思いますから、その辺は、怒られてもいいから、全部脇にやって、ほどほどにしてね。やっぱり大事なところをね。

大崎：雑用と言うのは、学内外？

金多：学内、外両方ともでしょう。仕分けして、自分の得意なもの、あるいは自分が興味のあるもの、そういうものは取り上げて、興味のないことはほとんど断つたらいいんじゃないですか。興味のないのを嫌々やるのは、それこそ時間のロスですよ。

古阪：ありがとうございました。